

なぜなぜ生物学

日本分子生物学会(編)(東京化学同人)(2010年12月刊行)

3000万円以上の公的研究費獲得者に「国民との科学・技術対話(アウトリーチ活動)」を義務化するという総合科学技術会議の決定(昨年6月)を聞いて戸惑いを覚えている研究者も多いことであろう。実際には、何をもちてアウトリーチ活動とするのかについてはまだ議論中のものであり、今後の動向を注目しなければいけないが、いずれにしても自分たちの研究をわかりやすいかたちで専門家以外の一般市民に伝えることが今まで以上に要求されるのはまちがいない。

そのような状況で時宜を得て出版されたのが、今回紹介する「なぜなぜ生物学」である。日本分子生物学会が創立30周年の記念として企画したという本書では新書で最新の生命科学のトピックスをその筋の専門家がわかりやすく解説している。トピックスをいくつか紹介すると、「遺伝子とパソコンソフトはどこが違うのか?」、「なぜ親子は似るの?」、「どうして心臓は左にあるの?」、「ケガをしてもちゃんとなおるよね!」、「遺伝子組換え食品は安全なの?」など、だれもが気になる内容ばかり13章からなっている。

一人が通して書いているわけではなくオムニバス式であるが、形式は対話形式と決まっている。以前評者も対話式でシャペロンについての解説を書いたことがあるのでよくわかるが、対話式だと話しの展開が非常にしやすい。本書から引用させてもらおう、「それにしても、○○と□□とどうちゃん?」「お、そら重要な質問や。」などなど。飛躍する展開でも自然と流れていく

のである。書き手の年代を反映するのか、父と高校生くらいの娘の対話が多いが、中には父・母・娘三人の掛け合いもある¹。書き手の背景を想像しながら楽しむのも一興だ。

どのトピックスもおもしろく、評者自身が勉強になったのであるが、全体としてみると扱う内容が広すぎるので焦点が定まらないかもしれない。また、惜しむらくは図が少ないこと。新書版の限界とは思うが、本文だけで内容をきちんと理解するのは生命科学に慣れ親しんでない人たちにはかなり難しいように感じた。それと、気軽に買ってもらうには1400円は少々高い。半額、それが無理でも1000円を切る価格設定にはこだわってほしかった(と好き勝手言ってますみません)。

とは言え、本書は生命科学を分子レベルで説明するたいへんすぐれた参考書となるのは間違いない。また、生命科学に携わる研究者が今後行うことになるかもしれないアウトリーチ活動の参考にもなるのではないかと。本書を読んだ一般市民の方々の感想をぜひ聞きたいものである。

(田口 英樹)



1. ただ、母が登場するのは最初と最後の一回で、残りはひたすら父と娘の会話なのは願望の表れであろうか・・・